

月報 シオン山

2026年10月4日発行 (No512)

日本バプテストシオン山教会

☎803-0846 北九州市小倉北区下到津2-15-21

Tel (093) 561-0772 Fax (093) 561-0760 E-mail: bapshion@eagle.ocn.ne.jp

.....

【月間聖句】

主を畏れることは知恵に初め

(箴言1章7節a)

在りし日の父との関わり中で思うこと

藤 田 恒

私は戦後、長崎市内で生まれました。5歳の頃、長崎に原子爆弾が投下されたことを知りました。そこで父親に尋ねました。「原爆が落とされた時、どこにいてどうしていたのですか」。すると父が「原子爆弾が落ちた時、机の下に潜った。そしたらガラスが飛んできて、足に刺さったんだよ」と話しました。

父にとって私は高齢になって与えられた念願の子どもでした。父親はどこにでも私を連れていきました。学会では父親の傍に黙って座っていました。父親は開業医でした。午後から良く往診に行きました。私は往診カバンを肩にかけて付いていきました、診察が終わるまで上り口に座って待ちました。その後父親は、必ず何軒か立ち寄りました。そこには原爆症の方がひとりで横たわっていました。父は必ず「近くまで来たから」と言いました。そして脈をとって血圧を測って、往診の最後はいつもでした。

中高校生の頃、晩酌している父の側にいて、父の話を聴き、私も良く話しました。ただ思い出すと被爆については一度も話した記憶はありません、

母親は、原子爆弾が投下された時、島原から木に登ってきのこ雲を

みたそうです、

原爆と父親の関わりについては。母親から聞きました。被爆直後、投下地点近くで医療団として働き。被爆した人に刺さったガラスをピンセットで取ったりしていたこと。原爆手帳交付の書類を書いていたそうです。

幼い時、通りすがりに顔や腕にケロイドのある人たちとすれ違ったりパスの中で会いました。それよりも印象に残っているのは、小学1年生の時に学校のトイレの小窓から見た光景でした。被爆した方々が検査を受けるために並んでおられました、皆うつむいていました。良く見ると知り合いの方が多くおられました。朝、登校中に笑顔で挨拶を交わしてくれるおばさんたちの表情があまりにも暗い姿・・・今でもしっかりと覚えています、

高校3年生の時、父は血痰に気が付き咽喉科に行きました。喉頭癌でした。大学病院で入退院を繰り返し放射線治療を受けました。私が大学1年生の秋、母から父の病状が良くないので帰って来るようにと電話があり、急きょ帰省しました。大学病院に行くと父親の喉は切開されて、管が取り付けられていました。父親とは筆談をしました。私は終わりの時まで父の側を離れませんでした、父は静かに逝きました。父親が亡くなって1時間後、父親がA B c c (アメリカ・日本原爆協力研究所)に献体登録をしていたとのことで遺体を引き取りに来て、すぐに解剖になりました。内臓を摘出して遺体にはもみ殻が詰められて帰ってきました。大学病院にいた叔父から『お父さんに会いたくなったら研究室に行くと、いつでも会える』と言われました。父親が献体したのは、ただ医学への貢献のためだとずっと思ってきました。それから時が流れ私は結婚して4人の子どもが与えられました。末の子どもが高校2年生の時母親が長崎から訪ねてきました。話をしていると突然「お父様は被爆しているのよ」とサラリと言いました。言った母の表情は秘密ごとから解き放たれたような何かホットした表情でした。家族中、親戚、知人等に箝口令がしかれてしたのか？献体したのもそのためだった？今までの小さな疑問が繋がっていきました。今は被爆の悲惨さを語られる方々は多くおられますしこの働きも大切なことです。しかし父は何も語らない方を選びました。爆心地付近や被爆者の残忍な状況。被爆者やその家族が受けた差別や偏見、不安等々、口を閉ざすことを選んだのだと思います。私が誕生したことは喜びであったが私の成長にはいつも不安があったと思います。原爆記念日の日、父はいつも診察室に静かに座っていました。

父親が被爆していたことを母から聴いてから以降、私は病気に掛かった時は必ず父の被爆のことを伝えています。

世界中で悲惨な争いは今も続いている。核の恐怖、国同士争いの中で家族離散、貧困、病の不安、子どもや女性の過重労働、地雷で手足

を失くしたり放射能を受けて苦しんでいる人達など。大国が正当性を叫んで、他国に圧力かけたり、他国に干渉したり戦いを仕掛ける国やリーダー達がおり、悲惨である。失望することばかりで世界に希望がないように思います。しかし。この世界は神様が創造されたものです。

天にまします我らの父よ、ねがわくはみ名をあがめさせたまえ。

み国を来たらせたまえ。

みこころの天になるごとく 地にもなさせたまえ。

我らの日用の糧を今日も与えたまえ。

我らに罪をおかす者を 我らがゆるすごとく、

我らの罪をもゆるしたまえ。

我らをこころみにあわせず 悪より救い出したまえ。

国とちからと栄えとは限りなく なんじのものなればなり。

主イエス・キリストが教えてくださった「主の祈り」をいつも心をこめて唱えたい、争いのない国で、希望と愛と平和のなかで過ごせまうようにと祈っていききたい、そして、世界の状況にいつも感心を持てたいと思います。